

浄

monthly
JŌDO

土

7・8

合併号
July・August 2004





昭和51年6月号



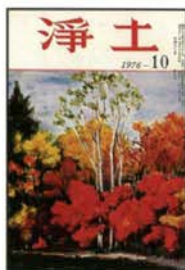
昭和51年7月号



昭和51年8月号



昭和51年9月号



昭和51年10月号



昭和51年11月号



昭和51年12月号



昭和52年1月号



昭和52年2月号



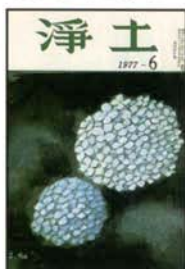
昭和52年3月号



昭和52年4月号



昭和52年5月号



昭和52年6月号



昭和52年7月号



昭和52年8月号



昭和52年9月号

寺院紀行

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

大阪・四天王寺

上宮学園



学校法人上宮学園、小林昭五学園長（左上）と林煥副学園長（右上）。下は上宮学園の名前が掲げられている上宮中、高等学校校舎



天文台施設も付設されている上宮学園校舎。五十年余の歴史ある学舎だ



講堂に祀られている上宮学園の学校の祖である法然上人像。その脇には浄土宗大阪支校時代の卒業生、教職員精霊の位牌が安置されている



大阪の中心部天王寺にある上宮学園の校庭はビルに囲まれている



同じ大阪府でも緑多い南河内郡太子町にある上宮学園上宮太子中、高等学校校舎。聖徳太子の墓跡のあるこの地に新設された上宮学園中学校から始まっている



上宮太子の校舎の廊下に飾られているステンドグラス。絵柄は善導大師と夢中対面する法然上人、いわゆる二祖対面だ。こうした仏教的装飾があちこちに施されている

長い渡り廊下で部活動の練習に励む上宮太子の生徒たち



亡くなった上宮太子の生徒のためにその両親から寄贈された生命の樹

毎年五月二十日に行われる校祖誕生会。上宮、上宮太子の両学園で行われる。写真は上宮体育館



校祖誕生会では、壇上正面に祀られた若き日の法然上人、勢至丸絵像に生徒による献花がさげられる



上宮学園は明治時代に浄土宗の支校として大宝寺の講堂から始まっている。大宝寺は上宮学園からほど近い生玉寺町にある浄土宗寺院だ



上宮中・高等学校の図書館に展示してある上宮学園の第六・七聯合教校時代の校舎の瓦



浄土

2004/7・8月号 目次

カラーグラビア 寺院紀行 上宮学園	写真=タカオカ邦彦	1
インタビュー 富士山から日本を変える	野口 健	6
表紙のことば	石川忠夫	13
寺院紀行 上宮学園	真山 剛	14
会いたい人 神田伯龍②	関 容子	24
響流十方	小村正孝	32
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	36
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ『さっちゃんはネッ』	かまちよしろう	51
編集後記		52



表紙題字=浄土門主 中村康隆 下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

スペシャル
インタビュー

富士山から

日本を変える

野口 健

アルピニスト



一九九九年に世界七大陸最高峰を当時最年少で征服したアルピニスト野口健氏。その後、エベレストや富士山の清掃活動を通じて、地球規模での環境問題に取り組み、また、シエルパ基金を設立した契機を野口氏にインタビューしました。

野口さんがアルピニストになられたきっかけは何だったのですか

父の仕事の関係で、中高生時代をイギリスの全寮制の立教英国学院で過ごしました。

この立教英国学院は規律が厳しく、たちまち落ちこぼれ、些細な事で上級生を殴ったことで停学処分になり自宅謹慎になってしまいました。

その時、父が「旅でもして、頭を冷やし、これからの自分のことを考えろ」と言われ、日本に帰って来ました。

たまたまある書店で、植村直巳さんの著書『青春を山に賭けて』が目に入り、植村さんのことは冒険家ぐらいとしか知らなかったのですが、読んでみたらピンとくるものがありましたね。僕の人生を変えることになりました。学校に戻ってもいろんな問題を起こし、自分には山を登るしかないと思いました。

十六歳ではじめてヨーロッパ大陸のモンブランに登頂したのを皮切りに、アフリカ大陸のキリマンジャロ、オーストラリア大陸のコジアスコ、南アメリカ大陸のアコンカグア、そして、十九歳で北アメリカのマッキンリー単独登頂と、十代で五大大陸最高峰を相次いで征服することができました。

野口さんにとって、山を登るといふことはどういうことですか。何か変化がありましたか

マッキンリーを単独で登頂した直後、深さ

一〇〇メートルぐらいのクレバスに落ち、どう這い上がったのか記憶にないんですが、「これで終りかな」と思いました

そのとき、足元に何か黒いものが見え、雪を掘ると、一羽の黒い鳥の死体が出てきました。氷河に迷い込んだ渡り鳥。飢えと寒さで死んでいったのかと思いました。それは、自らの非力を省みず、マッキンリーに迷い込んだ自分の姿のように思え、単独でマッキンリーを登るといことは、こういうことなのかと…。

大自然の中で自分は、この鳥と同じくつぼけな存在だなと感じたら、今までの自分の中にあったコンプレックスや余計なものが消えていました。

アルピニストの野口さんを、何が環境問題に向かわせていったのですか

エベレストは、チベットでは『チョモラン

マ』、ネパールでは『サガルマータ』と呼ばれています。エベレストという名はインド測量局長官のイギリス人の名前をつけたもので、現地名が無視されています。

ですから僕はどちらの側からアプローチするかで、名前を使い分けています。二つの名前前で呼ぶと混乱しますので、今回はエベレストを便宜上使います。

僕の目標の世界七大陸最高峰登頂は、エベレストが最後の関門になりました。

一九九九年に初めてエベレストに挑戦するにあたって、エベレストに関するビデオやテレビ番組など見てイメージトレーニングし、あらゆる情報を集めて登頂したのですが…。

僕が見た実際のエベレストはですね、ビデオやテレビ番組で見た一面の銀世界でなく、大量のゴミが溢れていました。これには驚かされましたね。でも、もっと驚かされたことがあったんです。

欧米の登山家たちが、普通標高七千メートル



のぐちけん

1973年8月アメリカ・ボストン生まれ。外交官の父とともに世界各地で幼年時代を過ごす。日本の地を初めて踏んだのは4歳の時。英国立教学院で中高校時代を過ごす。自宅謹慎処分を受ける。その時、故郷村直巳の「青春を山に賭けて」に感銘を受け登山を志す。高校卒業後、亜細亜大学国際関係学部に入學、1999年三度目の挑戦でエベレスト登頂に成功する。二十五歳で七大大陸最高峰世界最年少登頂記録を樹立する。以来エベレストのゴミ問題、シェルパ問題などに取組み、現在は小中学生を対象にした「野口健 自然学校」を開校。また、「富士山から日本を変える」をスローガンに精力的に講演活動を行っている。

ルを越えてくると、誰もが一キロでも荷物を軽くするのを考えるのに、彼らはゴミを回収し始めてるんですよ。

そのゴミの中に、日本語で書かれたゴミが散乱していました。それを見たヨーロッパの登山家から「日本の経済は一流だが、マナーは三流だな」と浴びせられた一言に、コンチクシヨーと思いました。が反論できませんでした。

結局、登頂は果たせぬままの帰国になり、後の記者会見の席で、「登頂できなかったのは辛かったけれど、エベレストに日本隊の捨てたゴミが多くあって、それで日本が否定されたことが辛かった」とコメントしたら、山岳会を中心に方々から圧力がかって来ましたね。悔しかったですよ。

「日本は三流」と言ったヨーロッパの登山家や圧力をかけて来た山岳関係者への怒りが、必ずゴミの山をきれいにしてやるという思いになり、エベレスト清掃登山をスタートさせたのかもしれない。

日本が世界の中でも環境への関心が低い理由はなんだとお考えですか

清掃登山をして、非常に印象的だったことが、ゴミを捨てる隊と捨てない隊は国によって分かれているということでした。ゴミを持ち帰る国はドイツ、デンマーク、ノルウェー、スイス。ゴミを置いて帰るのは日本、中国、韓国、インド、ロシアといった国でした。

環境問題が進んでいる国は国自体もきれいで、ゴミ問題にもしっかり取り組んでいます。はじめは、日本の登山家はマナーが悪いと思っていました。マナーの問題ではなく、日本の国の教育が問われていることに気づきました。子供から教育しないといけないんですよ。でも四年間、エベレスト清掃登山をやってきて、日本の登山家たちも変わってきたことがとっても嬉しいです。



エベレストに加え、富士山の清掃を始められた契機は何ですか

一九九九年に初めてエベレストに挑戦したときに、実はもう一つ気になる言葉がありました。「おまえら日本人はヒマラヤをマウントフジにするつもりか」と。

私は当初、この言葉の意味が理解できなかった。私は冬の富士山しか登っていなかった。雪に覆われた銀世界の富士山しか見ていなかった。この言葉を思い出し、夏の富士山に登ったとき、私の知っている富士山の姿はありませんでした。

夏の富士山は、30万人の人が登山されるそうです。ゴミと人の糞尿が垂れ流されていて、ぞっとしました。

中でも、山頂に自動販売機が並んでいる光景にはもっと驚かされました。世界の山を見ってきましたが、自動販売機のある山は初めてでした。

日本のシンボルの富士山が、こんな状態ではないのかと強い憤りを感じて、エベレスト清掃登山を始めた年から富士山の清掃登山を始めました。が、富士山より樹海の汚染に衝撃を受けました。富士山の再生は樹海を含めて行わないと、意味がないと思っています。これまで嫌がらせも多かったですよ。でも、大事なことは続けるということで、いつか国民的な運動に繋がっていくのではないかと諦めません。

清掃登山とともに、「シエルパ基金」を設立されたそうですが、目的は何ですか

ヒマラヤに挑戦する登山家の大半は、シエルパに助けられて目標を達成します。しかし

その蔭で多くのシエルバが遭難して亡くなっているんですが、報道されませんよね。

登山隊とシエルバの関係は共存体制にあると考えていますが、なかには共存体制になっておらず、シエルバに負担がかかり過ぎていくように感じられることがあります。

シエルバのご遺族だけでなく、遭難原因を調査する機関のためにも必要な基金だと思って、「シエルバ基金」を設立しました。

私は環境の野口と言われていますが、環境だけがテーマではありません。環境の問題、イメージだけで終わるのではなく、本当は人間の生活のなかに入って、タブーとか矛盾に突き当たっていかないとできないですよ。その時に、自分が正しいと思ったことをどこまで実現できるのか、です。

私が考える環境メッセンジャーは、「なぜ、人はゴミを捨てるのか」。捨てる人になって考えることから始めることをしないと、本当の環境問題は解決しないと思っています。

野口さんのインタビュを通して、野口さんは冒険登山家というより、世界のタブーへの挑戦の冒険家のように感じられました。

アルピニストの意味には、登山家というだけでなく、「より高く、より困難に」の精神を含んでいるとある本で読んだことがあります。まさに「野口健はアルピニストそのもの」と思いました。

聞きて 本誌・平井泰代子

表紙のことば

7
8
月

京の六斎念仏

平安中期、念仏聖空也上人が念仏を広めるために始めたと言われる踊躍念仏がもとになった芸能。鉦や太鼓ではやし、念仏を唱えながら踊る。もとは六斎日（月に6日ある忌み日すなわち陰暦では八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日。斎戒し八戒を守る精進潔斎日）に行われたのが、その名の由来である。室町中期頃から能、狂言と合体し、その後、豊臣秀吉の奨励もあり大衆化して、六斎日に関わりなく、盂蘭盆会の行事として行われている。

寺院紀行

大阪・四天王寺

上宮学園

撮影／夕力才力邦彦

文／真山剛



校祖誕生会で祀られる勢至丸絵像

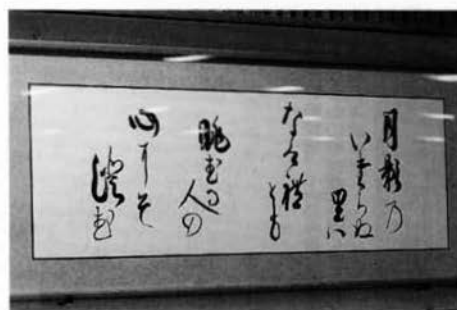
神仏分離令が出されたのは明治元年、新政権が国家神道として祭政一致をはかるための政令だった。そして、これがきっかけとなり、廃仏毀釈が全国に広まり、徳川幕府のもとに安逸を貪っていた仏教界は大いに打撃を受けた。

というのは教科書的な歴史解説だが、大切なのはその原因がどこにあったのか、ということである。

聖徳太子の仏教保護以来、時の権力者に保護され続けてきた仏教。戦国時代の織田信長や豊臣秀吉との対立はあったものの、徳川家康による天下統一によって、寺社奉行や檀家制度のもと再び庇護されてきた。いわば寺院が役所化した徳川二百六十年である。そしてこの間に僧侶は本分を忘れ、廃学、遊堕の道に転がり落ちていった。その結果、庶民の反感は頂点に達し、僧侶の還俗、仏像や伽藍の焼き打ちなどという排仏運動が起きたのである。つまり、僧侶自身の墮落が仏教の精神的、社会的遊離を招き、その結果寺院や僧侶の存在理由が極めて希薄になり、廃仏毀釈へとつながったのである。

しかし、すべての僧侶が自墮落になったわけではない。各宗派の傑僧はその事態を憂慮し、僧侶本来のなすべき修行と学問の道を明確に示唆し、実践していたのである。

浄土宗においては、西では知恩院七十三世名譽学天大僧正が中心となり、東では後に知恩院七十五世になる養鶴徹定師が中心となっ



校歌の「月影」は浄土宗の宗祖であり、上宮学園の校祖でもある法然上人の詠んだ歌で、学舎内にいくつも飾ってある

て興学が叫ばれ、やがて勸学院という学問所へとなつていった。その勸学の論達が発せられたのは、神仏判然の政令と同じ明治元年三月三十日のこと。そしてまさにこの論達を源流の一滴とし、現在の浄土宗の学校教育へとつながつてきたのだが、その精神を今でも色濃く残しているのが、今回訪れた上宮学園である。

「確かに校訓や学順といった教育指針はあります。ですが、突き詰めれば、法然上人の『ただ一向に念仏すべし』に尽きます。これこそ上宮の教育理念です」

昨年、身体を壊し車椅子の日々となつた上宮学園小林昭五学園長は、何のよどみもなくこう言い切る。

あえて誤解を恐れず言えば、上宮学園を小林学園と呼ぶことがある。これは現小林理事長の養父である小林大蔵師が第五代校長時代に学園を興隆させたこともあるが、それより何より、現小林学園長の揺るぎない信仰に基づく教育信念とその実践指導がこう言わしめているのである。

ここでその学園風景を見てみよう。

上宮学園の学校の祖は法然上人だが、その誕生と万物の生誕を祝う校祖誕生会が五月二十日、上宮中学校・高等学校の体育館で行われた。壇上に祀^{まつ}られた若き日の法然上人、勢至丸絵像への生徒代表の献花などの祝典、学校長講話と続き、最後の記念講演にあたり講



上宮太子の野球場。上宮高校、上宮太子高校ともに野球部は強く、ともに甲子園の常連校だ

演の先生を小林理事長が紹介し始めた時だった。

確かに二千人以上も入る体育館に入って二時間近い時間が経っていたので、生徒たちが疲れるのも無理はない。前列の生徒が肘をパイプ椅子にかけていた。それを見た壇上の小林理事長が一喝。一瞬のうちに会場の空気が張りつめた。

久しぶりに聞く怒鳴り声だった。怒鳴り声といつては違う、叱責の一声だった。妙に懐かしく聞こえたのだが、恐らく会場の生徒にとつては「大きい声出しやがって、うるさいな」といったところだろう。残念ながら、大きい声を出してもらえありがたさに気づくには彼らはまだ若すぎるのだが、悪いことを悪いということの大切さは少しは伝わったに違いない。

さて、校内に目を移すと、体育館の入り口、講堂、そして来賓室と、学校の要所々々に校祖の法然上人像が安置されている。また校歌も法然上人作の和歌『月影』で、これは浄土宗の宗歌でもある。いまどき珍しいこの古旋律の校歌が全国のお茶の間にテレビを通じて流されたことがある。昭和五十六年春の選抜高校野球で上宮学園が初勝利を収め、校旗掲揚ならびに校歌が斉唱された時だった。およそ八百年前の歌詞は多くの視聴者の興味をひいたようだが、その校歌を上宮学園では日々歌っているのである。

校訓は「正思明行」でお釈迦様と法然上人の教えからとったもの。



両校とも部活動が盛んだ。中でも両校の野球部、上宮中・高等学校の囲碁部、将棋部は全国制覇、優勝している強豪だ。



上宮中・高等学校の図書館
にある古書。明治三十三年
に集められた貴重な書物だ



上宮太子中・高等学校の正面入り口
の法然上人の立像（左）と上宮中・
高等学校に体育館入り口にまつって
ある法然上人坐像



学順は「一に掃除 二に勤行 三に学問」と、これまたまるでお寺のよう。そして、法然上人の浄土宗開宗の地であり、また入寂の地でもある知恩院をはじめ全国の法然上人ゆかりの地への参拝も宗教行事として続けられている。もちろん授業にも宗教の時間がある。これは学校が指導しているわけではないが、宗教の授業では先生と生徒が念仏を前後に一緒に称えているという。

もちろんこうしたことは学校案内等にも明記してある。

「入学したらわかることですから、学校案内にもちゃんと書きます。上宮学園は浄土宗を開宗した法然上人を校祖と仰ぐ学園だと」。自ら「どうも話し出すと長くなるのです」という小林理事長だが、その教育方針は一環している。

いま浄土宗には小学校から大学まで宗門関係学校と呼ばれる学校が三十八ある。これに幼稚園・保育所などまで含めると相当の数になる。もちろんその成り立ちは様々だが、冒頭の勸学院の流れから浄土宗が僧侶養成のために設立した学校をその前身とすると限られてくる。東京の芝学園、名古屋の東海学園、京都の東山学園、大阪の上宮学園、熊本の鎮西学園である。

この中で宗教性を最も前面に、そして明確に押し出した上で、多くの生徒を集めているのが上宮学園である。昨今の風潮からどうしても学業が優先され、道徳性や宗教性が疎んじられがちだが、小林



上宮中・高等学校の最寄り駅は近鉄線上本町駅になる

理事長の上宮学園はかつての宗立校としての特色をいまなお大切に
しつづけているのである。

「よく、上宮学園は進学校なのか、と聞かれます。そうだと答えま
す。また、上宮学園は法然上人が校祖の人間教育の学校なのか、と
も聞かれます。そうだと答えます。

私たちの目指す教育は勉学でもあり人間教育でもあるのです。た
だ、受験にばかり走るとやはり人間がゆがみます。円満な人格あつ
ての知識であり知恵ですから、突き詰めれば校祖法然上人の教えに
行き着くのです。それを保護者や生徒、そして先生にもわかつても
らってこその上宮学園なのです」

眼鏡の奥の鋭い眼差しに自信が満ち溢れている。そこで、小林理
事長にまさに理想の教育を実践しているのですねと聞いたら、厳し
かった目が氷解したように丸みを帯び、にこやかに笑いながらこう
答えられた。「実践なんておこがましい、目標にしてみんなで努力
しているところです」

さて、ここで上宮学園の歴史をたどってみよう。昭和五十六年に
発行された『上宮学園九十年の歩み』と、平成二年発行の『写真に
見る上宮の百年』にその足跡が詳しい。

上宮学園は明治二十三年九月に大阪生玉に浄土宗が大阪大教会支
校（大阪支校）を開設したことから始まる。当時は浄土宗の宗侶養

上宮太子中・高等学校は八つの最寄
り駅へ十二台の通学バスを運行して
いる



成機関で、この教校時代が明治四十五年まで。続いて財団法人組織の上宮中学校時代が昭和二十六年まで。そして学校法人組織の上宮学園として現在に至っている。

最初の校舎は今も寺町の生玉にある大宝寺の講堂を借り、四年後の明治二十七年に上之宮町、現在地に移転した。移転先の上之宮町は当時の大阪の街はずれで、上之宮神社、蔵鷲庵（曹洞宗寺院）、長池があり、桃や桜などが多い田舎だったという。明治三十二年には私立學校令が公布され、翌三十三年には後の大正天皇の御成婚記念で学園の文庫を設立した。浄土宗寺院などから多くの協力寄贈があり、現在も貴重な資料が残る図書館として受け継がれている。日清戦争から八年経った明治三十五年には忠魂祠堂が校庭の中央に竣工された。このお堂は太平洋戦争で焼失したが、その後、このお堂の再建のために求めた太子の地が今の上宮太子中・高等学校となっている。

財団法人上宮中学校時代には創立記念日制定、同窓会会報発刊、そして昭和四年の本館校舎建築などがあり、その校舎が今も学舎として使われ、翌五年には仏教青年会が生まれた。昭和十年には小林大蔵校長となり鉄筋校舎が竣工、やがて太平洋戦争へと突入する。昭和十七年には兄弟校、高安中学校が設立されるが、七年でその幕を閉じた。敗戦時にはG・H・Qに校舎を接收され、再び戻れたの



校祖誕生会で祝詞をのべる小林昭五学園長。一年前から車椅子の生活になっている

は昭和二十七年だった。戦後には新制中学と高校が設置され、昭和二十三年にはP・T・Aが結成、翌年には第一回の文化祭が開催され、戦後日本の急成長と足並みをそろえていくことになる。

昭和二十六年には学校法人となり、小林大蔵校長が上宮学園の学園長となる。同時に生徒心得、先の校訓、学順などが新しく制定された。ちなみに校歌も昭和三十年代に『月影』に変わっている。昭和三十七年には太子町に郊外教室開設の計画が持ち上がり、昭和四十四年の授業開始という形で実を結んだ。だが、惜しむらくは時代背景もあり、忠魂祠堂の再興は、かなわなかった。そして、昭和五十四年に鉄筋校舎となった太子町校舎は、平成三年に上宮太子高校、五年に上宮太子中学校という兄弟校の学舎になったのである。

百二十年にもなる歴史は奥深い。時代の流れの中で、浄土宗の僧侶養成機関が一般の学校に変遷したわけだが、その建学精神が未だに確固に息づいていることが素晴らしい。そして忘れてならないのは、この建学精神が今日の時代に受け入れられているからこそ、多くの学生が集まってきているのである。親子三代上宮学園という生徒、卒業後に母校に就職する生徒も少なくない。

僧侶の存在理由の一つは生きていくことの意味を探ることだろうが、こうした精神が生徒や先生の心から消えない限り、上宮学園の伝統はいつまでも輝き続けるだろう。

(ルポライター)



連載

人 会いたい
関 容子

神田伯龍
さん
②



伯龍さんは、今でも眼鏡をかけずに細かい字が読めるという。

「眼はいいんです。先代伯龍師匠に初めて会いに行つたときに、お前は眼が生きているから世話講談に向く。弟子にしよう、と合格したわけです。眼鏡をかけて高座に上る芸人がありますが、これはいけません。眼は口ほどに物を言い、つて……眼で話しますからね。眼鏡かけると眼が死んじゃうんですよ」

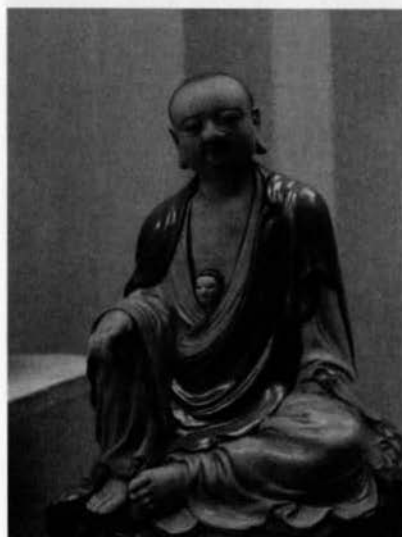
ふつくらとした温顔はいつ見てもお風呂上りのような色艶で、ほとんど微笑の絶えたことがない。大ぶりで豊かな肉づきの両耳は、福耳とでも言うのだろうか。

「この間、よく講談を聴きにきてくれるお客さんが台湾旅行をして、善導寺というお寺に行ったら、その国宝の仏像がわたしにそっくりだったんですって。あれ、伯龍さんがここにいるよ、っていうんで（笑）、証拠の写真を撮ってきてくれましたよ」

特別に観相学の勉強をしたわけでもないの

に、伯龍さんは人相や手相がわかるのだそう
だ。

「禪宗のお坊さんだった祖父の隔世遺伝でしょうかね。人の手を見ると、その人の人生が浮び上つてきて訴えかけてくるから、自然にわかるんです。自分自身、この年まで医者にかかったこともないし、手相では百二十歳までは確かな生命線が出てるので、自分であと五年延して、百二十五まで講談をやつていようと思つてます。よく、芸人は嫉妬心がなき



伯龍さんそっくりの台北善導寺の仏像

やいけない、と言う人がいますが、わたしは違ふと思う。羨ましいというのは、その人が憎らしいということですからね。そんなこと思つたら胃が痛くなつて、やがて癌になりますよ。自分が楽しいと思うことをしていれば、それで寿命が延びるんです」

先代師匠に入門のとき、父親が呼ばれて釘をさされたことがある。

「おとつあん、十年は食べられないよ、親が食べさせてやつてくれ、金を取ろうとするとか芸がいやしくなるから、金を使わしてやつてくださいよ、と言われて、うちは料理屋で金がありましたから、かなり小遣いを使わしてもらつてね。しかしその時分、師匠の家は上野桜木町にあつたんで、一応内弟子に入りました。朝早く起きて、まず薪でめしを炊くんです。師匠はおこげが好きでしてね、そこは料理屋の倅ですから、見よう見真似でうまいもんです。めしが炊けるとその匂いで師匠が起きてきて、それからしばらくたつておか

みさんが起きてくる（笑）。向柳原の芸者だった人です。師匠から教わつたことは、芝居でも高座でも、ゼニ払つて見に行け、つてことでした。木戸（銭）払えば真剣に憶える。それで元を取つてくる気になる、つて。たとえ女郎買いに行つても、部屋に箆笥はあつたかとか、花が活けてあつたかとか、そういう細かいとこ見てこなくちゃいけない、つて言つてました」

講談の黄金期だつた明治時代には東京に講談の席が二百軒もあり、講釈師は約八百人を教えたというが、伯龍さんの修業時代である昭和の初めのころもまだまだ隆盛だつた。

「町内に一つや二つ講釈場がありましたからね。最初にやらされるのが空板です。まだお客さんが誰もいないときに高座に上つて、張り扇でやたらにボンボン叩いて、修羅場を読む。これは、もう始まつてますよ、という客へのデモンストレーションですな。やがて、

昭和30年7月、講談組合ゆかた会での記念写真。
伯龍師匠は後列、右から四人目



講談組合大衆演劇部ゆかた会
昭和30年7月、講談組合ゆかた会での記念写真。
伯龍師匠は後列、右から四人目
この写真は、講談組合ゆかた会のメンバーが、昭和30年7月に撮影された記念写真である。写真には、伯龍師匠をはじめ、組合員たちが、和装の浴衣を着て、三列に並んで写っている。背景には、障子や掛け軸が見え、和室の雰囲気が感じられる。この写真は、組合の活動の一端を窺う貴重な記録となっている。

木戸で下足札を鳴らす音がパチン、いらつしやい、つていうんで一人でも客が入ると、降ろされちゃいます」

当時、講釈場にはまるで「住みこみのように」毎日通つてくる常連の客がいて、自分の座布団があり、座る場所も決つていた。

「魚河岸とかやつちゃ場（青果市場）とかの旦那衆ですよ。朝、仕事をしちゃうとあと用がないでしょ。来て、寝てるわけです。前座が大きな声を出すとギロツと見て、静かにやれ（笑）。高座に背を向けて、煙草の煙フーツと吹っかけたり。かと思うと前のほうに陣取つて、大きな懐中時計をわざと眺めながら、二分おきにフウツツ、フウツツとため息ついたりね（笑）。こつちが真打になると、俺は悪気があつたわけじゃあない、お前を早く一人前にしてやろうと思つたんだ、つて、祝儀に木戸を十人前、二十人前、積んでくれたりするんです」

昔はトリを取る真打が、木戸を出演者に配

分した。これがワリと呼ばれる分け前のこと。入りが悪いとトリが自腹で足し前をして割らなくてはならない。蟲屋客が十人分二十人分の木戸を払ってくれると大助かりだった。

「トリを取ると、うっかりすると損することがあるんで、だんだん席亭にまかせるようになりましたけどね。その当時でも、万年前座のような爺さんは定給制で、ヘタな真打よりよっぽどもらつてましたよ。何でも知つてるけど人氣のない、花のない、やたらに威張つてるといふのがどこにもいて、若いのが真打に昇進したりすると、そのときだけはむやみに頑張ったりする。そこで鰻でもおごるとまた元の地味な芸に戻るとか、いろいろいました（笑）」

先代伯龍はうまい人ではあつたが、どちらかと言えば地味で渋い芸風だったという。

「陰にこもつて泣かせる話が好きでしたね。俺の真似してたんじゃ、人氣が出ないから金にならない。派手な大島伯鶴はつかくに頼んでやるか

らつけ、つてね。講談じゃあ自分の師匠のことは師匠と言いますが、よその師匠のことは先生と呼ぶ。そこが落語と違います。伯鶴先生はわたしのことを小僧と呼ぶ。ずっと名前では呼ばれませんでした。初めて訪ねたとき、先生は神楽坂の演舞場に当時出てました。今日から十日間同じ話をするが全部違うからよく聴いとけ、と言われて『笹野権三郎海賊退治』というのを毎晩聴かしてもらいました。なるほど毎日違う。客によつて話が変わるんです。これは高座の基本ですよ。わたしの宝物ですね。だから今でも浅草、丸の内、新宿ではやりようが違います。お客にやらしてもらつてるわけですね」

大島伯鶴という人の愛宕山の間垣平九郎というのを、戦時中のラジオで聞いたような覚えがある。

「そうそう、『寛永三馬術』ね。時は寛永十一年十一月の二十四日……とこう一粒一つぶ立てて読むんですが、派手で愉快で面白かった

でしょ。浪人者の平九郎が脚の悪い痩せ馬にまたがつて来てね、キリギリスのごとくバツタのごとくヒヨコタリヒヨコタリ、なんて。それで愛宕山の急な男坂の石段を間垣が馬で登り切つて、將軍様御所望の梅のひと枝を手折つて衿に挿し、ひよいと下を見ると、家光公が帰りは楽な女坂から降りるようにと扇で指し招いているのを、そのまま降りて来い、と命じられたのかと思つてね。すると馬がしゃべるんですよ。旦那、こりゃあ冗談じゃないよ、これじゃああたしは助からない。我慢をしろ、これをやらなきゃ俺が儲からない。トホホホ、旦那が儲かつたつてわたしがダメだ（笑）」

伯龍（当時伯梅^{はくばい}）さんが十九歳のころ、戦争が激しくなつて、シンガポールの日本軍を慰問に行つた。

「行つたはいいが帰りが大変。台湾経由で貨物船で帰りました。すると次はコレヒドールへ行け、と言われて、平九郎の馬じゃないけ



米朝師匠（左）との二人会での一コマ



先代、五代目伯龍。東宝映画で国定忠次役をした時の一枚

ど、もう勘弁してください、って言ったら、じゃあ軍隊に引っぱる、というんで武山海兵団に入隊しました。横須賀線沿線、衣笠城のあるところです。裏山に洞窟があつて、空襲のたんびにそこへ逃げ込むと、退屈のぎに講談をやらされる。ネタがなくなると町へ出て講談本や時代小説を買つてきて、それを憶えてまた空襲になるとやる。おかげで軍隊生活三か月で、ずいぶんいろんなのを憶えましてよ。終戦を知って思わずバンザイ帰ると言ったら、上官は真っ青になつて東京警備隊

へ行ってくれ。それで、日比谷の野外音楽堂にいたら、ガヤガヤと立ち騒ぐ声がして、何でも白金小学校の教室に特攻隊崩れが立てこもって危なくて誰も近寄れない、ってことでした」

敗戦を知っても血気に逸つて一人乗りの飛行機で飛び立ってしまった神風特攻隊の若者たちが、燃料切れで不時着し、死に切れずに戻って「特攻崩れ」となるのだった。伯龍さんは、ちょうど同世代の男たちのことではあるし、軍服は着ているし、何とか心が通じるのではないかと思い、説得役を買って出る。

「ここで死ぬんだと言って十何人かで刀振り回しているところへ一人で乗りこんで、十分で治めちゃいましたからね。何だ、貴様！ まあまあ、死ぬなんていつでもできることですよ。ここは女の話が一番、と思ったから、あんた方は女郎買いつて知ってますか？ と始めたら、何だか面白そうなやつが来た、というんでひとまず鎮まりました。それでお釈迦様の例を引いたりして、死ねばまた勉強

し直してここへ戻ってくるんだから、生きるうちにいいことをしなさい。どうせいやつたていつか死ぬんだから、楽しいことをしたほうがトク。それで吉原の話を微に入り細に入り（笑）。みんなすっかりその気になって、今からすぐそこへ行こう、って。いや、こんなご時世じややってませんよ、と言ったら、ひどくがっかりしてましたねえ。まだ学校途中の世間知らずの坊ちゃんばかりでしたから」

その中に、山形県酒田市の名家、本間家の子息も混っていた。

「ね、こんな唄があるでしょう。へ本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に……ってね。こう歌われるくらいの大金持ちですよ。その若旦那の命の恩人だというんで、ずっと達者でいてくれたらわたしのいい御鼻屋さんになってくれたはずなのにねえ、惜しいことに肺結核で若死になすったそうで、実に残念なことでした」

（つづく）

ごくらくも　かくやあるらん　あらたのし

とくまいらばや　南無阿弥陀仏

（『法然上人御歌』）

（配流先に向かう途中、讃岐国塩飽島で歓待を受け、求められて法座を開いたところ、皆お念仏の教えに心から聞き入った。その姿に感銘を受けて）

阿弥陀さまの極楽浄土も、このような光景なのでしょうか。ああ、なんとすばらしいことでしょう。すぐにでも参りたいものです。南無阿弥陀仏…。

「待つ」楽しみ

ある朝、満員電車のこと。目の前のシートには二十代とおぼしき女性三人。皆同じような姿勢で同じことに熱中しています―携帯電話のメール。その軽やかな指さばきに、一瞬、目が釘付けになってしまいました。

それにしても便利なものです。いつでも、そしてほぼどこでも通話ができるようになった上に、話し声をはばかりる状況下でもメールを使えばリアルタイムで相手に意志を伝えられるのですから。わずか十数年前は、誰がこれほどまでになることを想像したでしょう。

通信のみならず、旅行するにしても荷物を送るにしても、また何かを作るにしても、技術の進歩によってスピードアップがはかられ、私たちの生活はより便利になりました。しかし同時に、その便利さという波が連れ去ってしまったものもある、と私は感じています。それは「待つ」ことです。

たとえば…。その昔は相手に思いを伝えるには、直接か、人を介してか、あるいは手紙に託して、でした。相手がごく近くの人ならいざしらず、遠くの方に伝える手段は手紙が主。距離によつては、今とは違って届くまでに何十日もかかることもあったでしょう。返事をもろうまでには最低その二倍。ちゃんと届くだろうか、これを読ん

だらあの方はどう思ってくれるだろう。その間の心中たるや……。中世の物語を読むと、乙女の恋心のせつなさが哀しいまでにリアルに伝わってきますが、そのリアルたらしめていたのが、実は首を長くして「待つ」という姿にあるように思えるのです。ほんの半世紀前までだって大同小異の状況だったでしょう。しかし、現代ではあまりそうしたことはありません。

待たなくなった、といえは写真もそうです。先日、数年ぶりに旧友が集まった時のこと、一人がデジタルカメラで写真を撮ってくれました。そして何やらカバンから取り出した小さな機械をカチャカチャやると、あらら、もうプリントされて出てきちゃいました。

かつてはフィルムを写真屋さんに出し、現像なりプリントが出来るまでに数日を要していました。それがいつの頃から当日仕上がりが当たり前となり、デジカメが普及した今や、撮ったらスグ、確認はおろか、さっきのようにプリントすることさえ可能となったのです。便利といえは便利なのですが、中学生の頃から少しばかり写真をかじってきた私などには、どこか味気なくも感じられます。出来上がってくるまでの期待と不安が、今思えば実に懐かしい。そしてその期待と不安は、出来上がった写真を手

にしたときの喜びも落胆も大きくしてくれる効能を併せ持っていました（フィルムカメラにはそんな隠れたよさがあると思っっているのは、私だけでしょうか。とはいえ、ランニングコストの低さに惹かれてデジカメも多用していますが）。

新幹線も、翌日お届けの宅配便も、携帯電話もデジタルカメラも、その便利さが「あたりまえ」となった今、もはや手放すことは難しいでしょう。でも、ちよつと立ち止まって、急がなくてもいいコトにはあえてそれなりの手段を利用するのも一興かもしれません。

ひるがえって、私たちにとつての「往生浄土」。

「その時」を「待つ」ことには、いろいろな心配や不安がつきまといまいます。でも、「往生浄土」は必ず実現することが阿弥陀さまによって約束されています。ですから、このことについてだけは、すぐさま結果を求める風潮に背を向け、存分に「待つ」楽しみを味わいたいと思っています。

（小村 正孝）

法然上人を
めぐる人々

一の谷



◆第八回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫

(七)

盛俊はあっさりと答えた。

「われこそは平家にその人ありと知られた越中の前司平盛俊である。もとは平家の一門であつたが、今は侍になつて御一門の方々を支えておる」

一気に彼はそう名乗ると、つづいて則綱に問いかけた。

「そなたはいずれの御方ぞ。お名乗りあれ。」

お聞きしたい」

則綱は地面になぎ倒され、からだ全体が盛俊の下に押さえつけられているなかから答えた。

「われらは武蔵の国の住人で猪俣の近平六則綱と申す者」

そう名乗つた彼の心には、突如として死への激しい恐怖と猛烈な生存欲が襲つてきた。

則綱はわめいた。

「お助けください」

七十人力の盛俊の力でしっかりと押さえつけられているからだをもがくようにして彼がかきくどいた。

「この度の戦い、平家すでに敗け戦さとお見うけいたす。やがて、もし源氏の世になつた暁には、盛俊殿の御一家をはじめお血筋につながる親しい人々、たとえ何十人おられましようとも、この則綱の勲功の賞に替えてもらうよう願ひ出、みな様のお命をお助けしましようぞ」

則綱はわめいた。

「であれば、何卒、今、われらの命をお助けください」

「憎い申し様かな」

と盛俊は、

「この盛俊、身は不遇なれども、もとはといえは平家の一門。いまさら源氏に助けてもらおうなどと思ひはせぬ」

いい終わると盛俊は、自分のからだの方に押さえつけている則綱のからだにさらに力を

加え、則綱の首をかこうとした。

「お助けくださいと願っているものを。投降者の首を切るという法がありましようや」

殺されると思った則綱は、夢中でわめきつづけた。「お助けください。お助けください」

戦場の修羅場である。だがこのとき、ふと慈悲の心が盛俊の心をよぎった。

「では助けよう」

と彼はいい、地面に倒れていた則綱の重いからだを引き起こした。

あたり一面は田圃である。あぜ道には春の草が生い出しはじめて、遠く近く、名もなき敗軍の武者たちが、西を目ざして落ちていく姿がみられる。

引き起こされた則綱は、盛俊と並び、二人はあぜ道の上に腰を下ろして合戦の次第や故郷のことなどを話しはじめた。

八

と、そこに近づいて来たのが、東国勢とお

ほしい一人の武者である。黒草^{くさ}緋の鎧を着、茶褐色の立派な馬に乗っているところをみると、名のある武者であろう。

東国の武者とみて、盛俊は不安になった。

「あれは誰か」

と則綱は訊ねた。

「気にすることはありません」

と則綱は、

「われらが親しくしている従兄弟の人見の四郎と申す者にて、われらを探してやって来たのであります」

しかし盛俊は不安な表情で、傍らにいる則綱から目を離し、近づいてくる人見の四郎を見つめていた。

と、そんな盛俊の一瞬のすきを見てとったのは則綱である。

（よし、四郎がやって来たならば、今一度盛俊と組み合つてやろう。四郎が助太刀したならば、七十人力といえども今度は盛俊を打ち倒せるかもしれぬ）

情けをうけて情けで返さず、情けをうけて仇でもって返すことを、このとき則綱は行ったのである。

則綱は人見の四郎が、助太刀に駆けよることが十分な距離にまで近づいてくるのを待った。

四郎は馬の歩を速めて近づいてくる。

と、そのとき、則綱はつつと立ち上がったかと思うと、則綱には気をゆるして四郎のほうに氣をとられている盛俊の胸板を思いきり太刀とともに蹴りあげた。

命を助けてやった則綱がこの拳に出るとは、盛俊には思いがけぬことであった。

彼はうしろの水田にどうつとばかりにあおむけに倒れた。そして起き上がろうとするところに、則綱は上からからだごとのしかかり、夢中で刀を抜いて、

「刀の柄つかも、こぶしも、通れ、通れ」

とばかりに無我夢中で盛俊の首を三度刺して切り落とした。

そこへ、人見の四郎が駆け寄ってきた。

と、その瞬間、ひとつの思いが則綱の胸をよぎった。

（盛俊の首を落としたのはこのわしだ。万が一にも、後日、ここに居合わせた四郎が、功名を己れのせいにするようなことがあつてはならぬ。このわしの功績であるという証拠をつくっておかなければならない）

ハッとこのことに気付いた則綱は、盛俊の首を自分の太刀の先につらぬき、高々とさし上げて、

「日ごろは噂にも聞き、今はとくと御覽ぜよ。武藏の国の住人、猪俣の近平六則綱、平家の方に名の聞こえた越中の前司盛俊をば、こうして打ち取ったぞ」
と大音声で呼ばわった。

(九)

鉄拐ヶ峰下の陣が敗れた、という報が一の谷の平家方に報ぜられたのは、二月七日の朝



九時前のことであつた。

一の谷には左馬頭行盛と薩摩守忠度ただのりが三万余騎で布陣していたが、山の手敗戦の報らせをうけると、騒がず、狼狽することなく、退却しはじめた。

一の谷の前方はすぐ須磨の浦であるが、忠度はそこから船に乗らず、さらに陸を西へ向かつて馬を走らせていた。明石の浦あたりから船に乗るつもりであつた。

そこで敵味方入り乱れて刀を交わし合い、あるいはその中を突っ切つて逃れていく騎馬武者や徒歩ちち武者の姿が目に入る。

「お上人」

と忠度は馬を走らせながら低くつぶやいていた。

二度、その姿に接し、教えを聞いたことがある法然の姿が心に浮かんでいた。

一度は後白河法皇の聴問の場に同席して、そして他の一度は、都落ちの前、彼自身、東山の法然の庵室を訪ねたのであつた。

後白河の聴問の場での法然の姿、その念仏往生の教え忘れ難く、源氏が蜂起し、東国や北陸で平家の敗戦が伝えられる中、明日への漠とした不安の中で、忠度は法然の庵室への坂を上つたのである。

「薩摩守忠度でございます。平家一門の者なれど、東国で頼朝が平家打倒の旗を上げて以来、都も騒がしうなりました。われらも心の休まるときがありませんぬ」

忠度はいった。

「院の聴問の場に、御房が招かれて法話なされたとき、われらも同席つかまつりました。その折のみ姿と法話の有難さ、忘れられませぬ。今の騒がしき世の中にあつて、心の支えを求めて御房をお訪ねいたしました」

忠度は率直にいった。

「わたくしは仏道に身を捧げました者。政まつの世界のことはわかりませぬが」

と法然はゆつくりと口を開いた。

「今の世のさまを見るに、まことに憂わしく、

悲しみに耐えませぬ」

「それは、今日この日まで、政の只中におりましたわれら一門の罪でございます」

「政をしている方々の責任ということがありますしょう」

法然は相手の機嫌をとるような世辞などは一切いわず、穏やかに、しかしきっぱりといった。

「しかし今、ここで責任や罪のなすり合いをしていても、事は何も解決いたしませんまい」

法然はつづけた。

「大切なことは、政を行う者が我欲を捨て、民衆生の幸せを願うて政を建て直すことに努め、行うことでありましょうぞ」

「その通りと存じます」

忠度は両手をつき、深く頭を下げた。法然のことは一つ一つが心に沁みだ。

「心の支えを求めてお訪ねくださったということですか」

と法然は、

「あみだ仏の本願により縛る以外、われら限りある人間の支えとなるものはありません。その本願とは——」

法然は穏やかに、みだ仏の本願と念仏往生の道を説きはじめた。

——今、西を目ざして落ちていく忠度の脳裏に、その法然の姿があざやかに甦っていた。

(つづく)

暑中お見舞い申し上げます

平成十六年

浄土門主
総本山知恩院門跡第八十六世

中村康隆

大本山増上寺
法主

成田有恒

大本山百萬遍知恩寺
法主

大野忍敬

大本山清浄華院
法主

大田秀三

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

浄土宗宗務総長

水谷幸正

大本山増上寺執事長

江口定信

〒105-0011 港区芝公園四・七・三五

平成大事業
御影堂屋根替大修理完成
阿弥陀堂新築再建完成

美作 誕生寺

〒709-3002 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL〇八六七 (二八)二二〇二
FAX〇八六七 (二八)二二六二

〒154-0017 世田谷区世田谷四・七・九

大吉寺

住職 成田昌憲

長野教区
十念寺住職

袖山 榮真

〒380-0845 長野市西後町一五六八

清水湊 貝付毘沙門天

忠高山
實相寺

〒420-0839 静岡市鷹匠二丁目二十四番十八号

玉桂山
華陽院

電話〇五四(二五二)三六七三
FAX〇五四(二五二)三六五六

(学)大乗淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川 匡俊

〒174-8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長 佐藤良純

淑徳学園中学校・高等学校

校長 大谷壽雄

塩釜市雲上寺

東海林 良雲

浄土宗大願寺住職
浄土宗議會議員

神谷 英敏

正覚寺

住職 江藤英賢

〒915-0813 武生市京町二・一・八
TEL〇七七八(二二二)一三一九
FAX〇七七八(二二二)六一一七

世継地藏 上徳寺

塩竈義弘
塩竈義明

京都市下京区富小路通五条下ル
本塩竈町五五六番地

弘経寺住職

金田 進徳

〒302-0023 茨城県取手市白山二・九・二八

孤峰山九十九ヶ丘蓮馨寺 呑龍上人奉祀
川越市仏教会長

糸原 恒久

〒350-0066 川越市連雀町七・一
電話〇四九(二二二)〇〇四三
FAX〇四九(二二二)〇六七六

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107-0052 東京都港区赤坂四・三・五
電話〇三(三三八三)三六三〇

明福寺

福井豊信

〒132-0013 江戸川区江戸川三・八・一

伊勢教区

山下法文

松阪市樹敬寺

愚鈍院 こつぶがや文庫主
住職

中村眞道

〒984-0051 仙台市若林区新寺三・一二・一七
電話〇二二(二五八)六〇五七

宗源寺

齋藤价洲

〒110-0015 台東区東上野五・一・六

函館 称名寺

〒040-0055 函館市船見町一八・一四
電話〇二三八(二二三)〇五七四

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八(五四一)〇二二七

骨仏の寺

一心寺

〒543-0052 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六(六七七)〇四四四

貞松院住職

山田和雄

〒392-0004 諏訪市諏訪二・一六・二七一
電話〇二六六(五)一九七〇
FAX〇二六六(五二)三四四六

〒112-0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

定義如来

西方寺

〒989-3213 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇二二(三三三)一〇一一
HomePage: <http://www.johg.or.jp/>
E-mail: sahouji@johg.or.jp

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0003 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二・一・一二

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四・二・二八
電話 ○四六七 (一一) 〇七〇三
FAX ○四六七 (一一) 五〇五一

天光院

真野龍海

<http://www.evam.jp/tenkoin>
ryumano@venus.dti.ne.jp

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四・一二・八

横浜

大光院

www.daikoin.com

光取寺

大室了皓

〒141-0021 品川区上大崎一・五・一〇
電話 ○三 (三四四一) 八三八四

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話 (03) 38421128 9
振替 001801245231



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●街

〈特選〉

ビル街に取り残されし畑かな

中島 二子

田畑が次々と埋められ町が広がってゆく。
団地ができビル街が伸びる。そういう中に取り
残された畑がある。高い建物に日照りも遮
られがちだが、コンクリートに囲まれた生活
にとって、ほっとする区画である。

〈佳作〉

行く春の駄菓子屋街に歩をゆるめ

河合富美枝

麦秋の羽州街道人まばら

佐藤 雅子

浜街道風に暴れる鯉幟

浜口 佳春

●裏

〈特選〉

近道は裏道梅雨のはしりかな

金谷 友江

裏通りは前から知っていて、急ぐ時などに
は近道をするのだろう。いまその通りを急い
でゆく。裏通りだから足元は多少おぼつかない

くても承知の上だが、梅雨入りのうつつうし
さが余計に気を急かせる。

〈佳作〉

無住寺の裏木戸鳴らす春嵐

細田 初枝

下駄投げて裏に返りぬ五月晴れ

谷 しげ子

路地裏の細長き空初燕

村上 青女

●自由題

〈特選〉

路を煮る厨の暗き通り雨

山口 信子

昼間は窓からの日ざしで、十分煮炊きがで
きるのだろう。いま路を煮ていると、にわか
に薄暗くなってきた。通り雨である。雨はじ
きに止み、また明るくなる。あるいは夕方が
近づいているのだろうか。

〈佳作〉

里の子の遊び仲間の蛇とかげ

片桐 てい女

黄金虫土の音して落ちにけり

袖岡 恭子

木の芽風耳をくすぐる糸電話

北川 弘子

窓間自由題

◎季語ではありません

浄土誌上句会のお知らせ

参加作品 編集部選

街

雨後の街ネオン踏みつつ銀座ゆく 細田 初枝

街路樹の下の涼しき茶房の灯 金谷 友江

大蛾貼り老のはじまる街路灯 片桐てい女

夕立の今風に降るオフィス街 大場 清

夕立の上がりし街の清々し 中島富士子

ふくろうの声初夏のふる里街に老ゆ 山本美代子

発光す青信号に街あかり 周東 澄江

春暑し街行く人も上着脱ぎ 今井 恵子

街路樹の芽吹き盛んや何の木で 増田 信子

裏返る下駄占ひや梅雨じめり 河合富美枝

締切・二〇〇四年八月三十一日

発表・『浄土』二〇〇四年十月号

選者・増田河郎子(「南風」主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

裏口に筒どさり置呉れし

機町や男は羽織の裏に凝る

朝顔のそつと覗くや裏通り

路地裏は子等の溜り場ばい廻し

路地裏に花色々の夏初め

惜春や羽裏に違る父の見得

足裏も老の歪みか立夏くる

梅干して裏返しおる老い一人

自由題

水琴の音しのばせて苔の花

忠魂碑天蓋に映ゆ椎若葉

鮎釣の大岩の席おのずから

濡れつばめ低空飛行や宙返り

揚雲雀寺史に異聞のさかさ竹

紫陽花に重なる想ひありにけり

高学年となりし兄弟風薫る

菊根分雨なき日々を憂ひけり

新緑の山肌眺めて湯につかる

山独活の白きがよろし地酒かな

巢燕の散らす卵の殻ぬくし

貼り葉少し匂いてバス薄暑

中島 一子

片桐てい女

大場 清

中島富士子

山本美代子

周東 澄江

佐藤 雅子

山口 信子

河合富美枝

細田 初枝

金谷 友江

中島 一子

片桐てい女

中島富士子

山本美代子

周東 澄江

今井 恵子

佐藤 雅子

増田 信子

浜口 佳春

さっちゃんね

12 かい目

かまち♡しろう



盆棚に風来たりて部屋和む

岱潤

先月佐世保で、小学校六年生の女子による、同級生の殺害というあまりにもショッキングな事件が起きた。

その加害者の女子が事件後、直接会って謝りたいという発言を繰り返していることが弁護士を通じて報じられた。

「死」という現実がその子に理解されていないのかよくはわからないが、現代の日本、「死」が見えなくなっていることが事実かもしれない。

今年のベストセラーになっている本に養老孟司さんの『死の壁』と、五木寛之さんの『元氣』がある。両方とも「死」をテーマにしたもので、どちらの本の中にも「現代の日本では死は遠ざけ、見えなくしている。しかし死を考えることは

この世を力強く生きるために最も必要なことである。」というようなことが書かれてあった。

先日NHKのテレビで、現代の葬儀というテーマで番組があり、様々に改良された葬儀のやり方、また自分の葬儀の演出などが話されていた。しかしその葬儀の意味するところ、その宗教的な意味合いについては一切触れることがなかった。死を見つめ、葬儀を考えながら一切宗教を無視して論じるその番組に滑稽ささえ覚えた。五木氏の言うように、お浄土を「元氣の海」と個人個人の認識の中で理解する言い方があってもいいのかもしれない、しかし宗教を無視して死を論じることは、あまりにも愚かに見えた。

(長)

雑誌「浄土」
特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光円寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
塚田弘導(平塚・晴雲寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村真道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤寛道

佐山哲郎

村田洋一

編集顧問

大室了悟

浄土

七十巻七・八月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十六年 六月二十日

発行 平成十六年 七月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティー

〒一〇五・〇〇一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三・五七八・六九四七

FAX 〇三・五七八・七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七

月刊

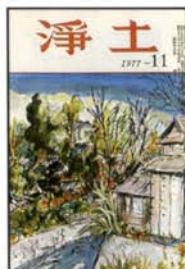
浄土 もうすぐ 800号

特別

企画 [表紙ライブラリー]



昭和52年10月号



昭和52年11月号



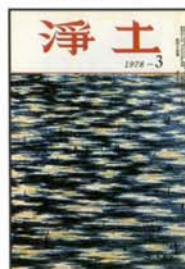
昭和52年12月号



昭和53年1月号



昭和53年2月号



昭和53年3月号



昭和53年4月号



昭和53年5月号



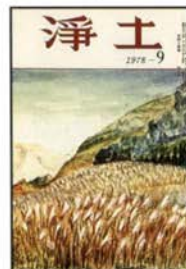
昭和53年6月号



昭和53年7月号



昭和53年8月号



昭和53年9月号



昭和53年10月号



昭和53年11月号



昭和53年12月号



昭和54年1月号

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円



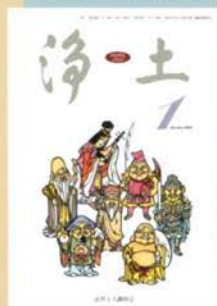
委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円

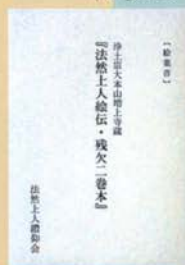


『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036